

主 日 礼 拝 順 序

(待降節第1主日)

11月29日 午前10:15~11:15

司会 遠藤 浩執事

前奏		瀬尾千絵姉
招詞		司 会 者
頌栄	539 (起立)	一 同
主の祈		一 同
交読文	39 (イザヤ53)	一 同
讃美歌	174 (起立)	一 同
聖書	ピリピ 2: 5~11	

(共新 363頁/初新 420頁)

牧会祈祷		岩井牧師
合唱	Ⅱ 96 (1,2,4)	聖歌隊
説教	「僕 ^{しもべ} の道」	岩井牧師
讃美歌	537 (起立)	一 同
献金		一 同
頌栄	542 (起立)	一 同
祝福		岩井牧師
応唱		聖歌隊
報告		遠藤 浩執事
後奏		瀬尾千絵姉

しもべ
僕 の 道

キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることを固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順でした。

フィリピ 2: 6~8

引用した聖書の言葉は「キリスト賛歌」と呼ばれる初代キリスト教会の賛美歌ないしは信仰告白文だと言われています。すでによく知られているものを、フィリピの信徒への手紙の著者パウロがわざわざ引用したのは、経験知に訴えて真理を語る、という手段をとったのです。しかし、一ヶ所「それも十字架の死に至るまで」の句は、パウロの附加挿入です。

何故この句を挿入したのか。一つは、元来この歌は、イエスの生涯と振舞が持っていた逆説を宿していますが、フィリピの教会で、日常歌われているうちに、慣習化し、定式化して、この教会の生活の中で滑らかになり、「とげ」のように刺さる根源性が失われていたことをパウロは憂えたからだ、と思われまます。「恐れおののきつつ自分の救いを達成する」(12節)は、教会には「慣れ」の無用なことを鋭く投げかけています。第二は、その「慣れ」を砕くものが、イエスの「十字架の死」であることを思い起させることです。イエスの死の理解には、イザヤ章53章にもとづいた「贖罪論的」理解があります。これはユダヤ的思想を含んで

いますが、ここでは語られていません。「信仰の理解」(こういう表言にそもそも反論される方はあると存じますが)、即ち、信じること、信じられていることの、関係性を自覚的・内省的に捉える捉え方は多様だと思います。パウロは、ここではフィリピの人たちのあの「慣れ」、気のつかない「高慢」に、「十字架の」という歴史的事実をもって迫ったのです。十字架は、ローマ支配下、政治犯が処刑される処刑台です。イエスは死んだのではなく、殺されたのです。弱さ、みじめさ、絶望の死でありました。「イエスの十字架はわれわれが自由に処理することのできないもの、把握することのできないもの、すなわちその前で人がただ沈黙するほかないものもつ、とげをもっている」(ルツ)と言われる通りです。

「僕(しもべ)」というと、倫理的規範を思ってしまうのは、私たちの不自由さです。そこを越えて、なお支えて下さる神の自由、恵みが、確かに存在することとして受けとるなら、そこには温みが、そして救いがあります。

(先週説教、岩井記)